



FUKUSHI & DESIGN 研究会

ANNUAL REPORT 2023

福祉とデザイン研究会とは？

福祉とデザインをかけあわせて、困りごとをアイデアのタネに

“福祉”の意味を紐解き、シンプルな言葉で導き出すと、「わたしたちの地域をよりよくする」なのだと思います。

2022年に滋賀県長浜市で始まった、福祉とデザイン研究会は、福祉にある課題に柔軟に挑戦していくための、実践的で実験的な取り組みです。福祉分野にある“困りごと”を、

新たな可能性を生み出す資源として捉え、多分野の協働により育てることを試みます。

「困りごとをアイデアのタネに」を合言葉に、困りごとの当事者とデザイナーなどの人材が手を組み、実践の中で双方が新たな視点や気づきを得ることで、参加者全員が視野を広げていくような場を目指しています。



福祉とデザイン、多分野が協働する意味

『システムの科学』という本の中で、著者のハーバード・A・サイモンさんはこんなことを書いています。

“現状をより好ましいものに変えるべく行為の道筋を考案するものは、誰でもデザイン思考で行動している。”

福祉の現場でも物事をよりよくするために、どのような方法を選択するか日々模索しています。福祉もデザインも、現状からよりよいものにしていこうというところで共通点があって、この組み合わせを並列に考えていけ

ば良いのではと思ったのです。

福祉分野で課題を解決しようとするとき、同じ福祉分野の中だけで取り組もうとする傾向があります。課題解決のためではなく、課題や困りごとを新しいアイデアをみつけるチャンスと捉えて、違う分野の人たちも巻き込みながらプロジェクトをつくることで、これまでにない流れを作ることができるのではないかと考えました。

インクルーシブデザインの考え方

福祉とデザイン研究会では、「インクルーシブデザイン」の考え方を軸に実践プロジェクトをすすめています。インクルーシブとは、様々な人や考え方を包み込むこと。そして、ものごとをデザインしていくプロセスに、多様な課題を抱える人々を意識的に巻き込み、

共に学び合い、つくりだしていく考え方や手法のことをインクルーシブデザインといいます。支援者やデザイナーが当事者と共に「本当に必要なもの」を考え、つくりだしていくことで、あらゆる人々が社会参加できる仕組みを生み出すことができると考えています。

こんな考え方もあるよ！

当事者が持つ課題を出発点にして、多くの人に刺さる包括的なアイデアと一緒に作るデザイン



ライラ・カセムさん
(一般社団法人シブヤフォント アートディレクター)

研究会にとってのインクルーシブデザイン

「福祉」は、多くの人々や企業にとって、その制度の専門性が高まるほど、「他人事」になりつつあります。地域包括ケアシステムの必要性の高まりや地域の子育ての現場でも同じように、「困った時は専門家が対応するもの」という意識になっているかもしれません。一般企業などに対して福祉分野との協働を呼びかけると、「関わり方がわからない」という意見をいただくことも少なくありませんでした。

そこで、身近な福祉課題を「自分事」として関わりやすいものにしていくために企画し

たのが福祉とデザイン研究会です。そして、「福祉課題」を「社会資源」として捉え直し、さまざまなアイデアにつなげていくために着目したのがインクルーシブデザインという考え方でした。インクルーシブデザインの考え方では「互いに学び合うこと」を大切にします。福祉課題を抱える当事者も、そこに参加するデザイナーや企業も互いに学び、新たな視野を手に入れることのできる場にしていくことで、これまでになく協働を生み出せると考えたのです。

2022年度の取り組み

初年度の研究会では、福祉分野のデザイン活用事例を学ぶ全3回の講座を実施しました。

1 インクルーシブデザインと福祉 —グラフィックデザイナーが見る 現場でのデザインの活かし方—

実施概要 話し手
2022年
9月21日(水)
18:30~20:00
＜参加者20名＞

ライラ・カセムさん
(一般社団法人シバフونت
アートディレクター)



↑レポート

インクルーシブデザインに関わる中で、「デザインを必要とする現場の人々と共にその場に合った持続可能な解決策をつくりあげる」ことに可能性を見出し、シバフونتの取り組みにいたる過程や、その後の展開についてお話しいただきました。

2 認知症とデザイン

実施概要 話し手
2022年
10月25日(火)
18:30~20:00
＜参加者23名＞

水内 智英さん
(京都工芸繊維大学
未来デザイン・工学機構准教授)
鬼頭 史樹さん
(一般社団法人ボーダレス代表理事)



↑レポート

日本に、600万人いる認知症の方々。どうすればいずれ誰しもが直面する可能性のある状況に対して、「他人事」ではなく「自分事」として考えることができるのか、事例をもとに紹介していただきました。

3 デザイナーと協働した フクションの取り組み

実施概要 話し手
2022年
11月25日(金)
18:30~20:00
＜参加者20名＞

藤本 達哉さん
(福井県健康福祉部
障がい福祉課)
根本 浩さん
(社会福祉法人福井県セルフ)



↑レポート

しょうがいをもつ方の賃金向上を目指し、ひとりひとりが働く喜びを実感できる「幸せ就労」の仕組みをつくる事を目的とした「フクション」についてご紹介いただき、福祉施設とデザイナー、それぞれの視点をもつ人々との関わり方についてお話をいただきました。

4 福祉とデザイン研究会 参加者お話し会

実施概要 コーディネート
2023年
1月20日(金)
18:30~20:00
＜参加者15名＞

長浜市社会福祉協議会



終了後も「こんなことができるのでは」「このような課題を解決したい」と止むことのない議論に答え、参加者同士が交流するお話し会を追加で開催。それぞれの伝えたいことや課題を議論したことで、次の展開につながるきっかけとなりました。

2023年度の取り組み

2022年度の研究会で一番多かった意見は「実践をしてみたい」というものでした。そこで、2023年度は①「困りごと」を持つ当事者と地域で活躍するデザイナーがチームをつくり、プロジェクトを実践すること、②「インクルーシブデザインチャ

レンジ」で、(一社)シバフونتの古戸鮎さんとライラ・カセムさんと共にプロジェクトに対するアドバイスやワークショップを行うこと、③活動を周知し、多分野の人たちを巻き込むこと、以上の3つを軸に研究会を実施しました。

実践プロジェクト

2023年度は3つのチームがそれぞれの困りごとに対する実践を行いました。

インクルーシブ デザインチャレンジ

一般社団法人シバフونتより講師を招き、ワークショップの実施などを行いました。

広報・啓発

SNSやウェブサイトを通じて幅広い層に情報発信を行いました。

4月	チームづくり 顔合わせ	一般参加の募集	SNS 発信
5月	デザインロードマップ づくり	2023年6月17日(土) 第1回公開セミナー	
6月			
7月			
8月	プロトタイプ検討		ウェブサイト公開
9月			
10月	アイデア連想 未来新聞づくり	2023年9月2日(土) 第2回公開セミナー	チーム紹介記事公開
11月			
12月	プロトタイプ制作		セミナー記事公開
1月			
2月	プロジェクト報告 講評会	2024年1月27日(土) 第3回公開セミナー	
3月			公共施設でのパネル 展示



グッジョブ×ジョブ

ミリョク発見！おしごとマッチング！



園りごと

「しょうがいのある子ども」と「仕事」のミスマッチ

発達しょうがいのある子どもたちには職場体験の機会が少なく、「自分」にどんな「仕事」が向いているのかわからないまま就職することで、働きづらさにつながってしまうことがあります。当事者のミリョク、企業のミリョク、両者がお互いのミリョクを発見できる機会をつくるために、子どもたちの就業への関心を高める「動画」の制作、知識を深める「職場見学」、働く経験を積むための「体験」の3つの実践を考えます。

2023年度の動き

プロジェクト開始当初は、「周囲の人が子どもたちをどう支援するか」という視点でしたが、議論を重ねていくうちに、「どうしたら子どもたち自身が自分の仕事を選ぶようになるか」と切り替わっていきました。グッジョブ×ジョブは2024年に団体となり、引き続き動画の制作などに取り組んでいます。

インタビュー

今回、デザイナーを加えたチームでプロジェクトを進めてみてどう感じましたか？

いろいろな人に意見をもらいながらみんなで組み立てていくところが、オレンジスマイルではやってきていなかったのだ、これがやっぱり1番かなと思います。自分たちで結局閉鎖的になってたなと思えます。「このサークルは発達しょうがいのチームだから」って、孤立してたんですけど、このプロジェクトを通して、デザイナーのななちゃん（小陣子さん）とも出会いましたし、皆さんこうやってディスカッションして、いろいろな意見をもらったことで、やっぱり多くの人たちとも関わらないと絶対に前には進めなくてことは確信しました。



森 秋子さん
(オレンジスマイル代表)

プロジェクトの中で思ったことはありますか？

森さんがめちゃくちゃ嬉しいことを言ってくれたなと思って。いろいろな方の意見があってなんぼだと思うんですよ。それを改善して展開していくことのたき台を、1個ちゃんと作り出したっていうのが、私の中の目標としてあります。たき台が出来上がって初めて今後たくさん動画も作っていきますし、今だけだけ皆さんにフィードバックももらえるにかかっています。



小陣子 葉々子さん
(星と道草)

福祉の分野と関わって感じたことはありますか？

福祉だからどうこう思ったことは、本当になくて。この取り組みに関わったことで、知ったことはとても大きいです。本当に、福祉とデザインってイコールだなんて感じました。私がハックするようなアイデアから内容を洗練させていくディレクションに不慣れなので、今回私をチャイスしてもらって大丈夫やったかな？っていう気持ちがあったんですけど、プロジェクトを積み重ねることで、「私でよかったんだ」と思えました。チャイスしてもらって学ばせてもらえたことに感謝です。

プロジェクトメンバー

実践者

オレンジスマイル

気づきや見守りが必要な子どもたちも。発達しょうがいの子どもたちの子育てを応援するサークル。

デザイナー

小陣子 葉々子さん(星と道草)

パッケージを中心としたグラフィックデザイナー。ローカルの可能性に関心を抱き続けて地域に密着。その時々々の最善を事業者様と模索し続けている。ライフワークは、自然と人・人とのホリスティックなつながりを育むこと、好奇心のまま遊ぶこと。

公的機関

はたらき・くらし・応援センターこほく

しょうがい者の地域における職業生活の自立を回り、雇用の促進および職業の安定を図ることを目的とした機関。

公的機関

湖北基幹相談支援センターふらっと

さまざまな団体や関係機関と協働し、しょうがいのある方が、自身が希望する生活ができるような湖北の地域づくりを行う。

このプロジェクトをもっと知りたい！



関連記事



グッジョブ×ジョブ
(instagram)



オレンジスマイル
(instagram)



星と道草
(instagram)



ノリノリ's

Act1 「ノ-フレイル リズムに のって リフレッシュ」

Act2 「Alltogether リズムにのって つなごう」

国りごと

「サロン※1」や「転倒予防教室」の
内容のマンネリ化と参加者の固定化

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、
サロン活動なども休止に。長期化する休止期
間の中で、高齢者のフレイル※2が課題と
なり、「もう少し易しく楽しい活動が
したい」といった声がありました。

2023年度の動き

体操ユニット「ノリノリ's」を結成し、
まずは高齢者のために、みんなが知っている
曲で、「思ったよりも、もう少しだけ手が伸
びる」ような体操を考案・動画を制作。課題や
目標を議論する中で「体操を通じた交流」にも
意識がいくようになります。現在は幅広い年
齢や多文化の人々が交流する
ためには？という視点で、
更なるプロジェクトが
進み始めています。



プロジェクトメンバー

実践者

長浜市社会福祉協議会 サロン支援員

市内の自治会などを対象にした、高齢者の居場所
づくり活動「サロン」や、健康づくりの「転倒予
防教室」を実施。

デザイナー

株式会社イケダ光音楽

長浜市、米原市に根差し、ヤマハ音楽教室や育
て支援、福祉事業などを展開。本プロジェクトでは、
リズム体操の振り付けなどに協力。

インタビュー

動画を实际に見ていただいて、
どのような反応がありましたか？

「楽しかったわ！」という反応をたくさんいただきました。その後
「DVD いつ届くの？」というお問い合わせを何度もいただいています。



内貴 紀香さん
(長浜市社会福祉協議会 サロン支援員)

今後の展開についてお聞かせください

体操のDVD は、2024年3月開催のサロン・転倒予防自主グルー
プ合同交流会に参加されたグループへ配布します。レクリエーショ
ンにあまり参加したくない方ももちろんおられると思いますが、
ちょっとでも知っている歌であれば参加しやすいかもしれない。その
場ではできなくても、お家に帰った後でも、「あんなことしてい
た」と思い出して体操をしてもらいたいですね。

リズム体操、口腔体操の制作を通じて
気づいたことはありますか？

今、こういった体操は「高齢になったらやらなきゃいけないもの」
という捉えられかたですよ。でも本当は、日常的にやるべきも
のなのだと思います。そして、体操をやることだけが目的ではな
くて、いろいろな層のコミュニケーションのきっかけになってほ
しいです。今回は高齢の方々を対象にしていますが、プロジェ
クトの参加を通して決してそれだけではないなと思いました。ご
当地ラジオ体操化であったりとか、地域の馴染みのある曲を使っ
たりとか、さまざまな展開ができるのではないのでしょうか。



池田 洵一さん
(株式会社 イケダ光音楽)

福祉の分野と関わって感じたことはありますか？

「福祉に携わった」というより、私であつた会社が持つるリ
ソースがこの国りごとに役に立つのであれば、チャレンジしたい
という気持ちで参加させていただきました。この取り組みに参加し
たからこそ、たくさんの方からいろいろなアイデアを聞くことが
できたと思っています。

このプロジェクトを
もっと知りたい！



関連記事



ノリノリ's
体操動画



長浜市社会福祉協議会
(HP)

※1 小地域（自治会）単位で定期的集まり、おしゃべりなどを通して交流する場をサロンといいます。長浜市では現在 259 箇所のサロンが活動しています。

※2 フレイル=健康と要介護の間の状態を指しますが、適切な予防・改善により健康な状態に戻ることができる状態のことです。



suinner

デザイナー

魅せたい 粋な服

図りごと

インクルーシブな視点の欠如

社会ではさまざまな分野で商品やサービスの開発が行われていますが、多くの開発において少数の人々の意見は考慮されないことがほとんどです。誰もが使いやすいものを持ったり、高齢になって車椅子を使ったりする可能性がある中、当事者をまきこみながら行うインクルーシブな商品開発のあり方そのものについて考えます。

2023年度の動き

マルチスイッチは、しょうがい者の社会参加に関する事業を展開しており、車椅子ユーザーが座ったままで着脱できる「スワリオン」シリーズや、冠婚葬祭のレンタル衣類などを開発してきました。そのインクルーシブな商品づくりに、ファッションを専門とするデザイナーがメンバーとして加わり、新たなフォーマル服を開発することに。第一回目の試作品を制作し、実際のユーザーへのヒアリングを行いました。

プロジェクトメンバー

実践者

木村 寛子(マルチスイッチ)

支援者

荒井 恵梨子(合同会社ケイワ)

長浜市北部を中心に、地域資源を活用した商品やサービスの開発をおこなう。本プロジェクトでは、全体の進行をサポート。

デザイナー

ワタナベユカリ(仕立屋と職人)

武蔵野美術大学卒業後、古着のリメイクを中心とした大の洋服屋にて企画、制作、販売を行う。2016年、ものをつくることの根本と技術を学び直すため文化服装学院とデザインの学校「このがっこう」をダブルスクールで通う。在学中、仕立屋と職人を結成。2020年に株式会社仕立屋と職人に法人化。

インタビュー

今回、このチームでプロジェクトを進めてみて、いかがでしたか？

わたし自身が「しょうがいを持つ人が着る服」というところにこだわっていたというのをすごく感じました。インクルーシブという、もっとそこを超えたところに視点を向けていかなあんのやなっていうのは、すごく思いました。今まで1人で服を作ってたかわらないまま生地は入れもていましたが、細かいアドバイスをいただいたことで、思い悩んでいたことがバツと晴れた気がします。それと、マルチスイッチの服は実はすごくコストがかかってしまい、いつもそこで行き詰まっていたってました。でも、ユカリさんが「これが欲しいと思ってくれる人は必ずいるから、そこに届けるつもりで頑張りましょう」と言ってくれたことが、私にとってすごく支えになっています。



木村 寛子さん
(マルチスイッチ代表)

プロジェクトに参加する中で“気づき”はありますか？

洋服って、立った姿が美しくなるように作るんですよね。座った状態でも動きやすいとか、それに適した素材や形について今回初めて考えたんですよ。それから、寛子さんから「しょうがいや高齢で車椅子の方は、冠婚葬祭などの場になかなか行く機会がない。着るものもないし、あんまり参加しなくてもいいよと言われてしまうことがある。」ということがあると聞いたんです。そういう時に着られる洋服があれば、参加ができるのかもしれない。そこから自分ができることが見えてきました。フォーマルの素材や形って、大体決まっているんですが、それをもっと分解して、どうやったらいろいろな人が着られる形にできるのかを考える機会になりました。



ワタナベユカリさん
(仕立屋と職人 代表取締役)

福祉の分野と関わっていかがでしたか？

デザインするとして、クライアントの要望があるじゃないですか。それと同じだったので、福祉だからどうこうとかというのはない。でもせっかく私が携わらせてもらうのであれば、それはイケないよね。木村さんのお話を聞く機会がたくさんあったので、今まで洋服に携わってきたけれども知らなかったことをたくさん聞けたので、すごくありがたい機会をいただきました。

このプロジェクトをもっと知りたい！



関連記事



マルチスイッチ
(HP)



仕立屋と職人
(HP)

Inclusive Design Challenge

研究会後記

2023年6月から2024年1月にかけて、3回にわたって行われたインクルーシブデザインチャレンジ。公開セミナーの開催を通じた“変化”や“気づき”について、研究会を主催する長浜市社会福祉協議会の山岡さんとインクルーシブデザインの講師を務めてくださった一般社団法人シブヤフォントのお2人が語ります。

インクルーシブデザイン
チャレンジに関する情報
や記事はこちらから▶



山岡伸次さん

長浜市社会福祉協議会職員



みなさんからもらったコメントの中に、「ちゃんとかがいい」というものがありました。福祉とデザインって、たぶんこういうことやと思うんですよ。プロジェクトチームがそれぞれ作り上げてきたものが、福祉だからということではなくて、もう普遍的なものになってきているから、「ちゃんとかがいい」という感想をいただけたんだと思います。

5年前、世の中は地域共生社会を目指さない、という風潮で、社協としても推進しようという流れでした。そのためにはいろいろな分野の人と連携しなければならないということ、商工関係など多分野の方達と4回会議をしたんです。でも回数を重ねるほど参加者は減り、

誰も喋れなくなっていく。なぜそうなったのかを聞いてみると、「言いたいことはわかる。でも言葉が難しい、どう参加したらよいかかわらない」と言われていて。それは確かにそうだな。今回、研究会という形で一緒に勉強しましょうと参加者を募ったら、いろいろな分野から人が集まって、大事なことで一緒にやろうと、自分事として考えてくれるようになりました。福祉っていう言葉を言い換えると、「より良くなるよ」です。それはデザインとの共通項ですね。「世の中を良くするために一緒にデザインさせませんか」と言ったことで、「あ、僕の知ってる言葉やし」って聞いてもらえるようになったのかと思います。

これからも「より良い暮らしのことをみんなで考えよう」という研究会になっていくといいなという風に考えてます。

古戸 勉さん

福祉作業所ふれんど施設長／一般社団法人シブヤフォント共同代表／社会福祉士

悩みを抱える当事者や社協の人がいる一方で、企業の人やデザイナーの人たちは「私ら福祉とかどう関係ないです、目の前の困りごとに一生懸命答えて、いいものを作りたいです」と言っている。そうすると、私も含め、実は福祉関係者自身が出会いを妨げてるんじゃないだろうかって真面目に思います。危険があってはいけないとか、トラブルを起こしてはいけないという、リスクマネジメントという言葉のもとに、本人がどう思っているかではなくて、私たちが代弁者だとして結果的にめちめちや社協から遠ざけてるのではないかなという感じました。今日、これまで福祉関係にあまり関わることもなかった人たちが、福祉の課題について話してるのが、「新しい試み」だと思います。これが普通になっていかないといい、福祉関係者である私たちも当然のように

関心を持って、変わっていかなくちゃいけないっていうのを、この研究会にコーディネーター的な感じで入ったつもりだけど本当はずっと自分も勉強していました。

皆さんと出会ってわずか1年間でこんなに変わるんだっていうを実感できたので、これからどんどん発信していってほしいです。実はこの研究会の報告を見て、東京でもワークショップをやりたいって言ってくれる人が出てきています。だから、この取り組みが発信されることで、日本の中いろんなところが変わっていくし、実はその中心に皆さんいる、みたいなところがあるかなと思います。



ライラ・カセムさん

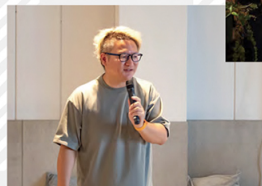
一般社団法人シブヤフォントアートディレクター／国立京奈女子大学特任准教授

インクルーシブデザインって、よくエモーションケースとビジネスケースを両方際立たせながらって言います。みんな今日、エモーション部分は完全に成り立ってるけど、じゃあそれがどう世の中で動くかとか、経済的なものができるかっていう、そこが仕組みがまだかな。そこをこれから2年くらいで作っていく必要があるかなと思います。参加者の方のコメントの中で「理想と制約」ってあったけど、私、やってたつもりだけど、今日の皆さんの意見も聞いて、来年はもうちょっとアップグレードして考えないとなつて、企画して思いました。あと、インクルーシブデザインにはやっぱり言葉もすごく大事。自分たちがやってることを噛み砕いてほしい、と。どんどん。私は結構、妄想インタビューって

いうのを自分の脳内でよくやるんですよ。ラジオ番組に出てる体で、妄想でインタビューに答えるっていうのをやって。でも、エモーションのようなトレーニングを何回も何回もやっていくと、だんだん言葉が洗練されて、ようやく自分たちの頭の中でもやりたいことがまとまってくる。物やサービス自体も大事だけど、言葉を磨くことでビジョンもミッションも作っていく、もっともっとうアイデアは洗練されていくかなと思います。

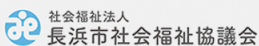
みんなよく頑張ったね。本当に、本当に。最初は「なにかやりたい」というところから、その時予想できてた部分もあれば、予想とかけ離れた所も多くて、それはすごく大きな成果かなと思います。でももっと関係性いいものも自分のプロジェクトにくっつけるような癖をつけてください。真面目になりすぎないでねっていうのが私のメッセージかな。楽しくやってそんなところはコラボしたいと思うので、その楽しみ心は忘れないでほしいな。





発行 2024年3月1日
主催 福祉とデザイン研究会
発行元 長浜市社会福祉協議会
〒529-0341 滋賀県長浜市湖北町速水2745番地
長浜市役所 湖北支所内 3階
TEL.0749-78-8294〈代〉／ FAX.0749-78-8800
企画制作 長浜市社会福祉協議会
企画協力・編集ディレクション 荒井恵梨子（合同会社 ケイファー）
プロジェクト協力 一般社団法人シブヤフォント
助成 中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」助成事業

INFORMATION



福祉とデザイン研究会
HP